トルコ

ボアジチ大学

交換留学報告書

静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科 3 年

ボアジチ大学での１学期間の留学は、私の価値観や人柄を大きく変える経験だった。最初はトルコに行く事が楽しみな反面、初めて訪れる都市ということもあり不安も大きかった。しかし、訪れてみると日本とは全く違う文化や習慣、国民性が感じられ、毎日が刺激的でとても充実していたと帰国した今特に感じる。

まずボアジチ大学について紹介する。ボアジチ大学は「トルコの東大」のような、優秀で常に高みを目指して努力する学生が多い。テスト前になると図書館の机が朝から夜遅くまでずっと埋まっている。私は今回３科目の授業と１科目体育の授業を取り、テスト前は特に毎日図書館にこもって勉強に励んだ。無事単位を取得できたが、彼らは私たち留学生の２倍以上授業を取っているし、寝ないで勉強している姿も見かけた。「トルコの経済は悪いから、将来はトルコではなく違う国に行きたい。だから自分は今一生懸命勉強して自分の将来の武器にしたい。」と心の内を明かしてくれた友達も何人かいた。正直私が日本で行っていた勉強よりも量が違ったし、必死になって勉強するという姿勢が私自身には足りなかったと改めて実感し、触発された。

次に生活についてだ。最初の一か月は、６人のトルコ人と、私を含めた３人の日本人は大学内の寮でルームシェアをした。最初の会話は、トイレの紙を流すかどうかという質問をしたことだった。トルコでは紙はトイレに流さないのだ。最初話しかけた際はとても緊張したのを覚えている。しかし彼女たちはとても優しくてフレンドリーだった。その後自己紹介をして正式に私たちの交流はスタートした。授業の登録の仕方やキャンパス内、イスタンブー

ルの街中を案内してくれたり、一緒に美味しいご飯を食べに行ったりした。また普段の生活でも、トルコ語や日本語を教え合い、今日何をしたか何があったかなどたくさん会話をしたことで、ただの友達とは違う特別な友達に変わった。私は勉強も大切だがこれこそ留学の醍醐味だと思った。育ってきたバックグラウンドも文化も違うが、こんなにもお互いに心を通わせ仲良くなれたことは幸せなことだった。しかし１か月後に隣の部屋に移動を強いられた。もちろんショックだったが、時には受け入れ次に進むことも大切だと学んだ。キャンパスは複数あり授業ごとで移動した。南キャンパスの景色や建物はヨーロッパ風でとても素敵だった。猫や犬もたくさんいるので動物好きにはたまらない大学だ。

　食事は基本大学内の学食でとった。一食約７５円ととても安く、食費を抑えられたと思う。しかし、外食もした。周りにはモールがあってフードコートを利用したし、大学の近くのカフェやご飯屋さんにもよく通った。私はトルコ料理がとても口に合ったので、食事は楽しかった。その中で一番驚いたのは、ヨーグルトはおかず（特にお肉）と共に食べるということだ。トルコのヨーグルトはプレーンかガーリック味で、さらにアイランという飲むヨーグルトがある。しかし日本のような甘いものではなく、塩気のあるものだ。最初は食べられなかったし飲めなかったが、過ごしていくうちにその味にはまっていってしまった。帰国した今も、トルコのヨーグルトが恋しいし自分で作ってみようと思う。

　私はトルコではNitto サークル、ゲームサークル、アルティメットフリスビーサークル、陸上サークルに参加した。Nitto サークルは日本に興味のある学生が参加していることも

あり、多くの出会いがあった。友達や話せる人を作りたいと思っているなら、Nitto サークルに入ることを一番におすすめしたい。ゲームサークルはほぼ初対面の人と共にゲームをして、ゲーム後には仲が自然に深まったし初めて挑戦したゲームもあった。アルティメットサークルはトルコ語でプレーをしていたが、チームメイトが通訳をしてくれたし言語が同じでなくてもスポーツを通じて仲良くなったり、共に喜び成長をしたりして楽しかった。陸上はトルコの森を５キロマラソンした。

旅行は、国内はイスタンブール、ブルサ、アンカラ、イズミルを訪れた。どの都市もトルコ人の友達と訪れたが、アンカラとイズミルは友達の実家に泊まらせていただいた。ホームステイの様に手作りのトルコの料理を食べたり、ご両親とトルコ語で簡単な会話をしたりして、滅多にできない体験をすることができた。またドイツのベルリンとイタリアのミラノとローマを訪れた。ヨーロッパはトルコ、日本それぞれの国との違いも感じられた。中でもミラノのピザは絶品だった。本場の伝統ある味を堪能する体験もできて良かった。

トルコのボアジチ大学の留学を一人でも多くの学生ができる事を願っています。ぜひ訪れる際は自分から友達に話しかける、多くの場所に行ってみる、参加してみることで充実すると思います。またトルコ語をもっと流暢に話せたらと毎日感じたので、トルコ語を少しでも多く勉強しておくことをおすすめします。このような貴重な機会を与えていただいたこと感謝申し上げます。ありがとうございました。この経験を自分の将来に活かすだけでなく、これから県大、静岡、日本、そして世界に対して自分に何ができるのか考えていきます。

ボアジチ大学　交換留学　報告書

静岡県立大学　国際関係学部　3 年

[redacted]

(1) はじめに

(2) 派遣先大学について

(3) 授業について

(4) その他（ボランティア・旅行等）

(5) 後輩へのアドバイス等

（1）20 年染み付いた日本の当たり前は、トルコでは意味をなさなかった。まずタバコの煙から逃げることはほぼ不可能で、5 分歩けば 5 匹の猫と会う。道に設置されているゴミ箱を覗けば、鉄屑とスイカが混同していた。初対面 3 分でご飯に誘われたり、サッカーを見に行けば問答無用でバックの中身を捨てられたりした。自分をタフな方だと思っていた私だが、最初は戸惑ってしまい、経験したことのないさまざまな側面からのストレスに苦しむ時期も途中あった。しかし、最後は国柄が出ていて面白いと感じたし、途中からは慣れて楽しむ自分がいた。色々な人と話す中で自分が思うよりも、自分は日本人であると気がついた。そんな長いようで短かった、まさに怒涛の半年間。ほんの一部分だが、私の学びと経験を共有していきたい。

（2）さて、ボアジチ大学留学についてだが、多くの留学体験者が入学当初から留学を

目指している中、私が留学に行くことになるとは入学時思いもしていなかった。ボアジチ大学を知るきっかけはボアジチ大学担当の佐藤先生が担当している講義を受けている時だ。いつものように授業を受けていると、ボアジチ大学派遣募集の話を授業内で聞いた。小さな好奇心からだったが、挑戦が好きな私には、いかない理由の方が小さく見えた。ギリギリではあったが、留学を決めた。(その分、留学前に手続きや準備がバタバタしたが。)

トルコについた時は、いつもは緊張しがちな自分だが、実感が湧かずおちついていた。空港には、すでに出迎えてくれるトルコの学生が一人来てくれていた。大学まで案内してもらい、大学に着くと、まずキャンパスの大きさに驚いた。

キャンパスについてだが、大きなキャンパスが 3、4 個密集している。キャンパス移動だけで 20 分程度歩くほどの大きさである。さすがトルコナンバー1 の大学だと感じた。アジアとヨーロッパを繋ぐボスフォラス海峡を毎日眺め、登校することができる。キャンパスで生活する中でまず気がついたことは、活気さである。黙っている人を見つけることが難しいほどに会話が飛び交っていた。キャンパス外も例外なく、人、音で溢れていた。結局最後まで、道路で突然意味もなく鳴り響くクラクションの音には慣れなかった。

(3) 授業については、体育も含めると 5 つ履修した。International Trade を専攻し

た。どれも難易度は高いと感じた。テスト前だけではなく、出席時に理解すること、復習することが求められる。私は英語が堪能ではないので、授業勉強以外に、英語そのものの勉強もしていた。テスト前は言わずもがな机と睨み合っていた。正確に測っていないが、大学受験をしていた時以上か同じくらいの勉強量だったろう。1、2 年次の勉強量、難易度とのギャップに苦しんだが、案外勉強を楽しんでいた。要因としては「環境」にある。図書館は常に席が埋まっていて、深夜まで多くの学生が勉強している。私の友人は図書館に住んでいるのではないかと疑うくらい勉強していた。（ちなみに図書館は 24 時間空いているので本当に住んでいたのかもしれない。）その姿をみて、英語力もなければ、授業中にすべて理解できるわけでもない知識量の私が勉強しないわけにはいかなかった。大学内は全員英語を話すことができるので、勉強してインプットしたことをすぐにアウトプットできる環境であったことも大きなメリットだろう。英語力向上を目指していた自分は、できるだけ多くの人と話すことを意識した。ボアジチの学生の英語力はネイティブスピーカーレベルの人もいれば、私と同じくらいのレベルの人まで幅広い。使う単語や文系、語彙などが偏らないように、幅広い人と話すことを意識していた。また、シャワーを浴びている時は呪文のように一人ごと英語を喋り、練習していた。結果、まだまだではあるが、特にスピーキングは向上し英語学習のスタートラインに立てたのではないだろうか。

友人作りの心配はいらないと考える。トルコの人々は底抜けに優しく、いつも助けて

くれる。アジア人であること自体がレアな存在なので、話しかけられることも少なくない。個人的な友人作りは、寮がメインだった。すでにグループが形成されているところに割り込み話すことは難しかったので、ランドリー部屋で洗濯をしに来る学生を捕まえて話すことで友人を増やしていった。友好的な彼らは一度話せば友達になれる。

「ニット会」という組織にも本当に助けられた。日本の文化に興味がある学生が集う組織であり、多くのかけがえのない優しい人々に出逢った。他大学からトルコに来ている日本人学生にもであうことができる。もし、これを読んでいる人がボアジチ大学に行くことがあれば、強く、強く参加を進める。

（4）授業以外では、主に 2 つの活動をした。

1 つ目はサッカー部での所属である。トライアウトも実施するほど人気の部活だったが、なんとか突破し、所属することができた。中高ほぼ全ての時間をサッカーに捧げた甲斐があった。スポーツの力は凄まじく、サッカーを通しても多くの友達を作ることができた。帰国前にはキャンパスを歩けば友達を見つけられるほどまで友好関係は広がり、改めてスポーツの人をつなぐ力に感銘を受けた。

2 つ目は言語ボランティア組織での活動である。Langaid という組織で日本語を教え

ることに注力した。

私は留学時、なんでもとりあえずやってみることをテーマにしていた。新しいことへの挑戦、昨年起きたトルコ南部地震からの復興金創出のために言語支援ボランティア組織に加入した。英語で日本語を教えるという状況に苦戦した。人前で喋ることに怖さを感じ、途中で講義を中止しようと考えることもあった。だが、初心を思い出すこと、ある友人の言葉が支えとなることで 10 回を超える授業をやり遂げることができた。結果、人間関係を広めるだけでなく、組織合計で 94750 リラを寄付し、私の授業では 7250 リラを創出することができた。この経験から、困難に立ち向かう強さを身につけることもできた。

トルコ人だけでなく色々な国の人と交流した。イタリア、フランス、スペイン、などヨーロッパを始め韓国、シンガポール、エジプト、、、あげるとキリがない。留学生を多く受け入れているボアジチでは本当に多種多様で色々な人種、国籍、宗教、年齢の人々と関わることができる。今思い返すと、想像の中のような生活だったが、確かに私の中にある経験であり、自分の楔となる半年間だ。

（5）最後に、この留学の機会を下さった静岡県立大学、ボアジチ大学の皆様に感謝を伝えたい。たくさんの人の協力で留学をすることができました。やはり、現地で見

て、聞いて、考え感じたことは新鮮かつ鮮烈でいかなければわからないことが多い。

この場をお借りしてお礼させていただきます。ありがとうございました。

この経験を一過性のものにせず、これからの大学生活、歩んでいく人生に生かしていく。とても楽しい半年間でした。もし、ボアジチ大学に限らず、留学に迷っている人がいれば、アドバイスもできると思います。